仙洲七部集

乃登聖

六

第拾八號
俳發部
六冊ノ内
鷺池藏書

中村俊定文庫
文庫 18
686
5

荒野集巻之六

雜

年中行夏内十二句

供屠蘇白散　荷今

いとけなかりしころ祝ひし人はいまは

春日祭

とりどりに名の長閑なる春日祭

石清水臨時祭

中村俊定文庫

[illegible]

灌佛

[illegible]月やついてく佛道

端午

[illegible]付る髪の長

施米

[illegible]て[illegible]米を虫臭さ

[illegible]

[illegible]の[illegible]七夕草を見たき

駒迎

[illegible]の[illegible]こ[illegible]

撰虫

[illegible]の[illegible]

十月更衣

[illegible]衣

五節

帝姫に来て指を折る人
遠難
花を折るや腸を折る思ひ西

詩題十二句　野水

今日不知誰計會
春風春水一時來
氷消波動春風起
白片落梅浮渕水

春来無伴閑遊少
花賣酒多酒たのまれ隣少
花下忘帰因美景
寂入なれば人の心も寂しかり
留春春不留春歸人
寂寞
山吉もこそ飛へ春の野辺の風

巖風吹袂衣
不寒復不熱

徐脫松下帽
池晩蓮芳謝

蓮の色もしろくなりぬ
暑月貧家何処有客
來唯贈北窓風

涼をとゝし如ぬるより小のまゝ

大底四時心惣苦就中斷腸是秋天
雲の端々秋の気
夜來風雨後秋気颯然新
秋の面々秋の風
遥々鐘滿初夜長
耿々星河欲曙天
殘燈孤枕獨斜光月穿牖

弱り寒や浮る白つゝまるの月

一方物　秋霜能懐色

白つゝまるや寒ふ部てるるむを秋のあ

十月　江南天気好

可憐冬景似春義

こかしらを志ゝ〳〵息つく小ちゝ

寂寞深村夜残雪中況

御めくさ野ゝこ也むやゝ寒のうゝ

白頭夜礼佛名経

佛尼の礼さ腰懐く白髮ル

猫の子の撫ひのうゝ結はしも

さすつゝ行りくて

鋸鑢目立　舟泉

かゝ結ゝのり又月りいるゝさつふりル

付木突

五月雨の頃の人の面
鈎瓶縄打
かへるちやはのくらぶ秋の星
糊賣
あさぢふのさびしつもれる
馬糞撥
こがらしの松ちるふるてつまりて

李夫人
魂在何許香煙引到焚處
かけ絵の抱はらくつるふる
楊貴妃
雲鬢半偏新睡覺花
冠不整下堂
もるる風に芳田の
昭陽人

越人

小頭鞋履窄衣裳青黛
黙眉々細長外人不見々應笑
[illegible]

西施

宮中拾得蛾眉斧不獻吾
君是愛君

[illegible]

王照君

王貌風流勝畫圖
[illegible]

一目留主[illegible]

卯

寒やの牧や法佛供燈火[illegible]

辰

杜[illegible]

巳

釣雪

[illegible]

午

[illegible]

未

蟬乃声之武家[illegible]多[illegible]

申

五月雨や[illegible]

[illegible]

[illegible]

山猟

樹水

[illegible]

野鳥

児竹

[illegible]

星虫

含呫

[illegible]

海奠

杉の戸を鎖引きて金の月　仝

川奠

秋の昏稽川くの火ぬるとゝ　含呫

牛馬四足是謂天落馬首穿牛

鼻是謂人

一方を杭ちく桃ち絶ゑる郷　越人

藏舟於壑藏山於澤謂之

固然而夜半有力者負

之而走

かくのごとく師走の市にうるさい

絶聖棄知大盜乃止

七夕にもなるもし

鋭青矢

兵をもて殺すものを地獄　桂夕

鈍者壽

鶏頭乃雪しなるとみえて秋　市山

藤房

はゝさえて鳴やむ鳴をきゝなり　一井

師直

うつくしく人まみえぬ荊かな　長虹

一休

にくゝしのかゝれかしや月の雲　瑞水

法然

鳴妻乃後くとはなしてうつゝかな　萬弾

凸岩

花く知らともなし又減る岩の角　瑞水

海岩

昔ことゝし絵ちまとおもふかな　全

曠野集巻之七

名所

つくまのすみ奥を見る所竜田川　杜国

――奥行月や或らん大江山　荷兮

かゝ橋乃松をもたらす朧哉　芭蕉

芦原一把うつゝ切てる伊賀の陽水　陽水

嵯峨はゆゝをそろあはれぬもの盛　荷兮

琵琶橋　脆望

[illegible]獄さむき陰[illegible]の　合歓
[illegible]　宗祇

義濃國[illegible]所の山[illegible]
なを[illegible]

美濃郡にて布を賣れる更衣　杜國
麦うつや門[illegible]あさ[illegible]の　童五
五月雨くか[illegible]の[illegible]橋　芭蕉
湖[illegible]　去來

牛もはしる[illegible]のあさりの月雨　一髮

角田川

いさのはの[illegible]の[illegible]ひく　貞室
みよしのの[illegible]秋の夏の音　破笠
いさらひも[illegible]なの[illegible]　芭蕉
月や杖さ[illegible]なる角田川　越人

九月十三夜

角[illegible]富士あ[illegible]の月[illegible]　素堂

略[illegible]　胡及

略[illegible]　剛支

武[illegible]　舟泉

湖[illegible]　嵩白

[illegible]　伊藤　随友

むさしの[illegible]　陵恵

[illegible]と生[illegible]　俊似

[illegible]の稲[illegible]　俳嵩　一笑

雪ふる富士[illegible]　湍水

[illegible]　野水

星崎の[illegible]　芭蕉

[illegible]　如行

旅

雲[illegible]上[illegible]　芭蕉

大和国[illegible]尾村[illegible]

[illegible]の[illegible]　全

橘咲星を眠るごとくなり　夕机
はの入や舟さしこむ桃のむ　一髮
のさらしや湯の音ぞ生さうな　荷兮
出る川脱ぐ後さたひぬ衣二つ　芭蕉

ある人の餞別　之

かるさ次あるさ松ぞ笑ひ　除風
寂しさ如き食鐵ぞ冷やしぬ　冬松
數をこそすらしに歩る藤棚　昌碧

五月雨や桂月を忘す市祐家　松芳
夕ぐれとの天名ゝ一志ほ　傘下

芭蕉去る

稲妻にもつきぬるうの那　釣雪
なさ〳〵く枝さす秋の蟬　一井
あさ風さりうの飛ぶ　野水
拍いも出さ〳〵蛙のうのさ　舟泉
寂ちゝ松さ〳〵ぬさ　嵐弾

[illegible]

文級乃月[illegible]こ人[illegible]秋[illegible]　荷今

越人孫[illegible]

月[illegible]脇[illegible]馬乃うへ　野水

[illegible]秋[illegible]　芭蕉

[illegible]乃[illegible]秋の[illegible]　路通

[illegible]

[illegible]

將棋桶に庶を[illegible]秋の山　荷今

[illegible]稲[illegible]　京　[illegible]

入月[illegible]　玄察

[illegible]　一井

[illegible]川[illegible]人[illegible]

澤菴乃墓[illegible]秋の雲　文鱗

草枕[illegible]　芭蕉

[illegible]乃[illegible]村[illegible]秋　津嶋　常秀

四角あるて芭蕉ちるく通ぬく

いく度霜ふる神ほとけ古ほこらひさ　荷兮

ちりこそ羽織を絵に入るきり　野水

其角をわかるるときき

あくるあれば出るもの有　荷兮

天然ちくこの神ちもく人ちもの　越人

うくるのるたてゆくるふ　傘下

星人のうちのふうしの　宗因

越人ちの高の澤まて

えとこの神とこ人孫ちそのりき　芭蕉

旅ちの夜ちくるやの煤拂　同

述懐

世ちの居を捨てちるは

きゆるはちく水もきえてちるも　路通

子を獨守りて回ちと打嬰のな　伎宣

余ちの回ちは墓入ぬ日ちの春ちな　落梧

高野にて

雑の色　芭蕉

夕あの雲ちぎれ〳〵

あぢさゐのついでに　荷兮

きぬ入湯もひとり一盃　同

一なのなつかしあるじ有の秋　杏雨

杜國

梅吉

扇子をあつらへゆるせきの夏　扶風

ゆるゝや白髪ふかつく麻衣賣　亀洞

九月十日ふる雪のうつて

かくれあるやうな家の中ふる菊　嵐雪

この夕べ月見ぬ人の坊主の秋　暁雨

人のいやがるをうらやむ

三神ちぢれあり神の素性者　芭蕉

四星の人ゝ去ゆのち雪

こがらしの吹きまくやふゆひより　杜國

鎌倉建長寺にまゐりて

吹きちらす山のあらしはわれもかな　越人

ある人の方にくりてとしをとし

吹きあはせよ一筋たきぎ

あさ顔なほ吹きあはせる渡しかな　荷兮

ちりのこる雪にうつるや

ちらちらの腰巾やゆん鐘の夢　氣弾

稽の火ゆ親子見さす侘れ水　去來

月や遠く耳やちのくるとしの　西武

妙るさとや腰の抜ける法華　芭蕉

ちるくのるをたのもしの神の　除風

老とまるて贅生よるる

り年や親くたるをかくれ　越人

恵

まの野くあるくの声ふ　伊勢　一有妻

きぬ〳〵や余のとくとくあたる　除風

数度あく〳〵寒のわたる〳〵哉　長虹

むしてゝ乃月くらく秋ぬる〳〵　文淵

出テにい神をふてゝる女う那　冬文

さくひめ〳〵妹う恨ゆらく蒼ゆり　心棘

六官粉黛奥顔色

寒月園の稿書消ゆ七月の彩　長虹

一年〳〵是人待のあ仏をゆり那　尚白

さしてをれよ

つきのしとあるゆゝ神〳〵女房也　荷今

ちるとるのゝ〳〵屋ゆる〳〵つまとゝの家　小春

妻の気配あゝ〳〵ゆく送り　越人

松の中時雨ゆく旅のくゝゆり　俊似

抱おもひ火燈をゆくいるむ　舟泉

うゝわく火燈ゆるの神ゆ　嵐雪

山畑ものゝ〳〵ゆ華引　松芳

こぬしを露見るしたりけり　冬松

おそろしやぬしぬしの出御勢さ　昌碧

奥常

未朝々

若衆を連舞阿弥陀仏なやみ　守武

世事迅速

咲つぼみ何ぞ乃花ぞ咲しも白露八　傘下

未朝々

菊苗や空生くれ明乃月のもとまき　堺　乞順

松坂の清水あふ人の手きゝり

まきりひやせる

橋乃ゆらも新しぬきてわたりし　荷兮

いまとの連歌く

まのうくえかゝるく隣る室の前　京　去来

ある人子うし　あり死にる時しきまて

あさむの小氏とまゆるちらゝ乱　荷兮

世とともに妻の名ぼりぬる哉
水無月の相の山もみぢ葉をしぬへし　野水

辞世

あさ顔や竹箒一川の主コ寿
子ゝをゝ仏なる哉

仏教のあるも知らぬ一躍り　落梧

一原野ふて
をゝゝゝの世い町ゝ
ものぬるさし　釣雪

妻の恵善り
をゝゝなのゝしをゝの星人ゝ哉ゝの世　自悦

李下ゝ妻乃ゝきゝりしを
いゝゝゝ

孫ゝ孫すやかゝへひゝゆく小ぼろ　去来

コ寿　多きゝりし後

その人ゝ鼾さゝく秋のゝ夜　其角

あゝ花ゝ哉ゝ哉ゝ哉ゝ哉ゝ

杉ふるやなほり合ふ秋の雲　尚白

ある人の追善に

埋火もきはやなみたの烹るにも　芭蕉

旅よてみちうりも所へ

あハ雪ふりてうめもうつ消ゆ　嵐蹊

ちるもの野にうつるや仏の名残　加賀ノ人　山春

曠野集巻之八

釋教

伊勢にて

神垣や杉あるはなもうつる泉殿　芭蕉

夏ゝ来るあ杉ふるもりはなれ　嵐蹊

西行上人五百歳忌

たりきをもとるに御る梅の風　荷兮

杉ふるに遠ゝ

蓮翹や千年を経て月出し　胡及

うゑ育て幹の緑うるはし二王山　松芳

木履くく俗もあるより雨乃花　杜國

作りこうもとを高つ結くて花のもと　冬松

花に酒俗やも俗ん惜さうの水　其角

夏享つちはへ辰の歳孫生月東照宮の別當
僧正の法房に逝去大師近産　執事法華
八講の法華経を聴聞ありける
序品のうちなり

散花の雨をむかうの山　越人

女房の聴聞をとゝめ給ふ時
白菊の花を散らす雨

あるじ龍女成佛の所をかりて志のひあるを
白菊かむ声のしきりなり

ほうゝとゝ鳥うるはしやなしの実　同

親育ち尾上のさくら咲ぬより　後似

古寺や法をとゝめぬ蓮草　一井

八雲うるはし

海棠の花ひらむやうひ　仔猿　千圃

咲よりふる色人なすれ紅杜丹　一井

夏山や本陰しの江湖新屋　莖葉

[illegible]

薩佛乃はつ[illegible]　芭蕉

薩佛の[illegible]　尚白

[illegible]

腰のあつさ[illegible]　一雪

[illegible]　加賀　一笑

十如是

[illegible]　荷兮

昂身昂昂佛

复隠乃[illegible]の佛　愚孟

ほころひや俗の[illegible]　鼠彈

[illegible]　荷兮

[illegible]　探丸

石龕に[illegible]　文里

魂祭舟[illegible]　亀洞

[illegible]　卜枝

桜待ちそらうとて松乃陰　釣雪

平ホ施一切

桜待つ人を見るにつけ　後似

稲妻の大佛松の中ぶり　荷兮

恒越えて引導敬ふ中ぶり　卜枝

ある人四時の暑抑なりとて水鏡を

熱とて不食不関をうを感じ

糸も乃とくとく

乃くとぬら佛となるハぬろ　荷兮

あるるの毎りく

燕も浄寺乃鼓へあとうて　其角

進とあるく切全松りの月の舟　一井

秋の子と本紙をとる陸仏　卜枝

人のあたにあるとしりおむ

るるまくまとくれるまを

衣ふるくみとあり一時雨　嵐蹄

鎌倉の西国論まるく

たうとうとの濃や直とく形るるん　越人

古寺の雪

曙や伽藍の雪見四ひ　荷今

同

雪ふりやうるこ二王ゝ片　腕　俊似

つゝりをくこハされもき雪仏　一井

教寿する人のさハゝ和歌　文角

千観ゝ馬もかせしゝ　其角

藥王品　七句

如寒者得火

ゝ白くもゝの咲つゝあゝ　胡及

如裸者得衣

雪乃日ゝ伽楊指ふあゝ家

如商人得主

双氏乃あひてゝゝむついゝ

如子得母

竹ゝてくをけゝれつくゝけの風

如渡得船

月ぞ此隣の板木さらさらり

如病得醫

かくしてさ清ぬ付添山ぶし

如晴得燈

独のよるもかりひゆるもとさに起さる

神祇

古ゝゑも雪ちるうる獅子頭　釣雪

二月廿五日　廿四日の月ぞ梅　荷今

ちんゝと梅ぞうる庭ぞ　同

ゆるもあひてこゝし神の梅　亀洞

上下のさゝぬやうさ神の梅　昌碧

灯のかすのなりきり梅の中　釣雪

何のやうにかの人にこそ　梅のむ　越人
見しかくあるこそさるかの梅　舟泉
月代もさるかるやうや　梅の香　雨桐
門あるて梅さそ　殖蘭　かりり　重五
筑馬さそ人の後はさめ　玄察
花さく　まて　歯朱かさとる　秋　鈍可
宮乃後川後さくるさめ　李桃
はる後の末ふ　秋の中の　好葉

はるさそ　秋の中を　過りり　玄察
袁さる　秋をわ　くる　夫　串　うな　亀洞
破扇　つ　ふ　ちうす　侍　秋　う　秋　未学
川　茶　さ　後　ま　さ　神　く　山　秋　小　荷今
こかし　や　星　秋　子　覗　く　神　興　秋　盃　尚白
月　秋　恵　氏　須　さ　こ　ら　よ　あ　ま　ま　松芳
み　さ　神　や　称　宜　の　さ　ま　る　油　筒　落梧

若宮奉納

さてさてめでたき神々不　利重
跡の方や宮寺すぎの梢不　野水
新麻川若水の流れ神不　昌碧
かつらきの神とふるさと庭火不　村俊
橋杭や代参の群れうるひ　卜枝

祝

肩付きいくよなれも年不　冬文
荷竹の四十乃まさく

実を作る作るゆるふ　重五
君の代やさくらの玉つきに　越人
青苔の伊勢の神の石　傘下
いさらの酒の名は土と杜鵑の　亀洞
夕代の秋にちひさきこと不　同

さてかく神ねりる人まりをき
先祖へ梅の実のみ乾と　芭蕉